

テレビの変化期における番組副題の形態素解析

—女性向け実用教養番組『婦人百科』を対象として—

辻 泰明

筑波大学図書館情報メディア系

tsujiy@slis.tsukuba.ac.jp

本研究は、日本でのテレビの変化期、すなわち 1980 年代におけるテレビ視聴時間量の一時的な減少に伴う番組態様の変化期での、女性向け実用教養番組『婦人百科』について、形態素解析によって副題を分析し、その品詞分布の変化と番組内容の変化との関係およびその意義を考察することを目的とする。1980 年度から 1989 年度まで 10 年間の『番組確定表』を元に、同期間に放送された『婦人百科』1853 本の副題に対して形態素解析をおこない、当該期における変化を調査した。その結果、『婦人百科』の副題は、1980 年代中頃を境として、名詞が用いられる比率が減少しているのに対し、動詞が用いられる比率が増加していることが明らかになった。このことは、テレビの変化期において、番組の形式には表立った変化がなかった女性向け実用教養番組『婦人百科』においても、番組内容には「教養」重視から「実技」重視へという変化が生じていたことに呼応すると考えられ、1980 年代半ばにおけるテレビメディアの変化の一端を数量的に可視化するものである。

Morphological Analysis of Television Program Titles in the Transition Period of Television Media in Japan: Focusing on the Cultural Programs for Women “Fujin-Hyakka”

Yasuaki TSUJI

Faculty of Library, Information and Media Science, University of Tsukuba

The purpose of this study is to consider the transformation of television programs in mid 1980s, namely the transition period of television media, in Japan. This paper, at first, investigates the fixed program schedule list from fiscal year 1980 to 1989, and then, scrutinizes the changes of the titles of the cultural program for women “Fujin-Hyakka” in the period by analyzing their morphemes. The result is that the ratio of nouns in the titles of “Fujin-Hyakka” decreased and in contrast, that of verbs increased, after mid 1980s. This fact indicates the content of cultural programs for women “Fujin-Hyakka” transferred its major emphasis from culture to physical skills in the period despite of the lack of their noticeable change of forms, thus this study visualizes an aspect of transformation of television media in mid 1980s in Japan.

1.1 研究背景

1. はじめに

本研究は、1980 年代のテレビメディアにおける女性向け実用教養番組『婦人百科』について、形態素解析を用いて副題を分析することにより、この時期におけるテレビメディアの変化の一樣相を明らかにすることを目的とする。

2015 年に放送文化研究所がおこなった「日本人とテレビ 2015」調査 [1] によれば、2010 年と比較してテレビを“「ほとんど、まったく見ない」人と「短時間」(30 分～2 時間) 視聴の人が増加、「長時間」(4 時間以上) 視聴の人が減少” [2] した。その結果、全体の視聴時間は、この調査を始めた 1985 年以降で“初めて「短時間化」する”

[3] 傾向に転じた。いわゆる「テレビ離れ」が進んでいることが明らかになったのである。こうした「テレビ離れ」は、実は今回が初めてではなく過去にもあった。「日本人とテレビ」調査が開始される直前の1980年代半ばのことである。

日本におけるテレビ放送は、1953年2月の放送開始以後、1959年度あたりから急速に発展して1960年代半ばに白黒テレビが普及の頂点に達した。その後、高度成長期を通じて視聴時間を拡大しながら、1970年代半ばに視聴時間のピークを記録し、その後“漸減しながらではあるが、比較的安定した状態”[4]を保った。ところが、“1980年代にはいると視聴時間に減少の兆しがみえ始め（中略）85年には視聴時間は3時間にまで減少した。”[5]

1980年代におけるテレビを取り巻く状況の変化は早い段階から懸念され、井上（1981）は、テレビが“いつ見てもきまりきったパターンをなぞる（中略）マンネリズムの文化を生み出し（後略）”“新しい価値観を用意するものでもなく、新しい世界を見せるわけでもない、既成の世界をなぞる番組群”が存在すると指摘[6]している。また、“テレビが新しい段階に歩を進め出した、あるいは進めざるをえない段階を迎えるに至ったということは確かなようである。テレビを取り巻く外在的、あるいは内在的な諸条件が、新しい段階を準備しつつあるように思われる。”[7]とも記している。

視聴時間減少の要因についても、さまざまに検討され、“82年に実施した「テレビ30年」調査は、（中略）人びとのテレビ以外の余暇行動の増加やテレビ自体の放送内容のマンネリ化、質の低下などを指摘”[8]していた。また、この時代はニューメディアが喧伝された時期でもあり、“ビデオやテレビゲームの普及は、テレビの位置づけをその利用面において、唯一絶対のメディアから目的によって使い分けられるメディアの1つへと変えていった。”[9]ことも視聴時間減少の要因とみなされていた。

1980年代は現在と同様の「テレビ離れ」が懸念された時代だったのである。しかし、1985年を底として、“86年以降視聴時間は漸増傾向に転じ”[10]た。

次の図1は1970年代から1990年代までの視聴時間の推移を示すものである。

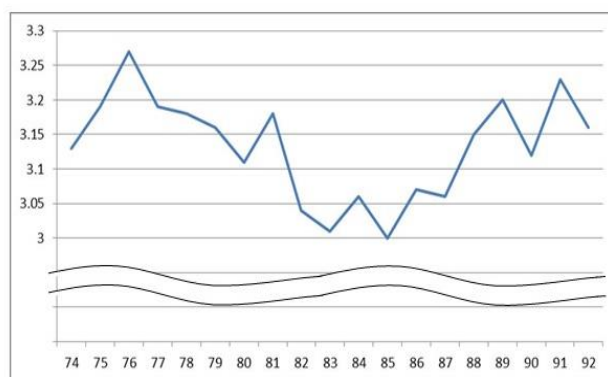


図1 テレビ視聴時間の推移 [11]

図1に示したように、視聴時間は、増減を繰り返しながらも、1985年を底とするV字形をなして推移している。視聴時間がV字回復を示すにいたった理由については、新機軸番組の登場やVTR機材の小型化と中継技術の向上といったテクノロジーの進歩による映像の多様化、あるいは、余暇時間のさらなる増大によるテレビへの回帰など、さまざまな考察が、戸村(1991)や戸村・白石(1993)らによってなされている。

特に番組については、この時期に、「教養の娯楽化」や「報道の劇場化」という大きな変化が生じ、『クイズ面白ゼミナール』、『なるほど!ザ・ワールド』など教養番組や紀行番組と合体した新たな形式のクイズバラエティの登場[12]や『ニュースステーション』に代表されるニュースショーの出現など、新機軸番組が輩出したことが、目にみえる形での大きな変化として挙げられている。[13]

1981年に井上が指摘[14]したように、1980年代のテレビは、技術や番組の変革に伴う「新しい段階」となったのである。このことによって、本研究においては、1980年代を日本における「テレビの変化期」と規定する。

しかしながら、「テレビの変化期」におけるテレビ番組の変化については、いくつかの新機軸番組が登場したことが現象として挙げられるだけで、変化が新機軸番組の登場にとどまるものなのか、それともテレビ番組全般にわたる大きな変革が生じていたのかは研究されておらず、その実態はくわしく明らかになっていない。

1.2 先行研究

1980年代のテレビ視聴の動向に関しては、戸村(1991)が、「データにみる80年代のテレビ視聴動向」[15]において、「視聴率調査」や「生活時間調査」などの調査データをもとに考察している。しかし、その考察は、あくまで視聴時間の量や視聴時間帯の変化といった受け手の側の動向をとらえたものであって、送り手の側の変化は考察の主たる対象とはなっていない。

その他、戸村・白石(1993)[16]、白石・井田(2003)[17]が、1980年代を変化の時としてとらえる考察をおこなっているが、専ら視聴時間量の変動によって40年ないし50年という大きな流れの中に1980年代を位置づけようとするものであり、番組の内容における変化の実態を考究したものではない。

1.3 研究目的

本研究の目的は、テレビの変化期、すなわち1980年代半ばのテレビ番組における内容の変化を形態素解析によって数量的に明らかにすることである。

日本におけるテレビの変化期において番組内容の変化は数量的にどのように観測できるのか、その実態を明らかにし、意義を考察することは、知的資源としての放送番組を研究する上で意義がある。また、再び「テレビ離れ」が生じ、テレビからインターネットへというメディアの転換が生じつつある現在の状況への示唆も得られると思われる。

1.4 研究方法

本研究の研究方法は、資料調査および形態素解析に基づく調査対象資料の分析である。

調査の対象期間は、本研究でテレビの変化期と規定した1980年代すなわち1980年度から1989年度までとする。期間を年度単位とするのは、放送番組の編成が、通常3月末から4月初頭におこなわれる番組改編を基準として年度ごとに区切ら

れるからである。

調査の対象は、同期間における女性向け実用教養番組『婦人百科』である。

女性向け実用教養番組とは、公共放送の編成においては、1980年代まで教養番組中の「婦人番組」として分類されていたもので、テレビ草創期から女性を対象として編成された番組を指す。女性を対象とする専門の番組が設けられたのは、女性の社会進出が本格化する以前、在宅時間が男性よりも長い女性は、重要な視聴者層とみなされたからである。

戸村(1993)は、“国民全体の視聴動向を見る上で、女性はパイロット的役割を果たしている”[18]と評しているが、1980年代における視聴時間の減少は、まず女性層において現れた。“女性の視聴時間量がピークとなったのは76年であることは国民全体と同じであるが、最低を記録したのは82年であり、全体が最も低くなった85年より数年早かった”[19]のである。

したがって、女性向け実用教養番組においては、視聴時間量の減少に対して早期に危機感に襲われ、なんらかの変容が模索されたと想定される。それにも関わらず、女性向け実用教養番組には1980年代に表立った新機軸番組は現れなかった。そのため、これまで「テレビの変化期」における女性向け実用教養番組の動向について言及されることはなく、その内容にどのような変化が生じていたのか、その様相が明らかになっていない。

なお、女性向け実用教養番組は、公共放送ではテレビの草創期から1990年代にいたるまで編成されていたが、民間放送では定時番組としては早期に消滅した[20]とされている。

1980年代において、女性向け実用教養番組の放送枠(定曜定時に編成され、定められた形式と分野の中でさまざまな題材が取り上げられる「枠」としての番組)は、『婦人百科』であるため、本研究では、この『婦人百科』を調査対象の放送枠とする。

次の表1は、1980年代の編成資料[21]に記された『婦人百科』の番組(放送枠)概要を年度ごとに記したものである。

表1 『婦人百科』番組概要の年度ごと変遷 [22]

年度	番組概要
1980	家庭婦人を対象とする趣味と教養を兼ねた実用番組.
1981	家庭婦人を対象とする趣味と教養を兼ねた実用番組.
1982	家庭婦人を対象とする趣味と教養を兼ねた実用番組.
1983	家庭婦人を対象とする趣味と教養を兼ねた実用番組.
1984	家庭婦人を対象とする趣味と教養を兼ねた実用番組.
1985	家庭婦人を対象とする, 実技指導を中心にした実用番組.
1986	家庭婦人を対象とする, 実技指導を中心にした実用番組.
1987	家庭婦人を対象とする, 実技指導を中心にした実用番組. また, “男性”も視聴者に取り込む編成をした.
1988	主に家庭婦人から男性までを対象とする実技指導を中心とした実用番組.
1989	主に家庭婦人を対象に, 男性までを含めた, 実技指導中心の実用番組.

表1から明らかなように、『婦人百科』の番組概要 [23] は、1985年度の時点でそれまでと異なるものに変化している。1984年度までは「趣味と教養を兼ねた」実用番組だったのが、1985年度以降は「実技指導を中心にした」実用番組となったのである。この変化が番組内容においてはどのように反映されたのかを把握するために、本研究では、『番組確定表』を調査対象資料として形態素解析をおこなう。

『番組確定表』とは、放送が確定した番組の放送枠（番組）名、副題、出演者などが放送時刻順に記録され、変更も追記された表である。長廣（2004）は、『番組確定表』を“NHKの放送を、記録の上からたどることができる唯一の第一次資料”と評している [24]。『番組確定表』はNHKアーカイブスに保存され、放送記録の確認や放送文化の研究のために利用されている。その一部はCD-ROMに収録され、許可を得れば放送博物館で閲覧することが可能である。

『番組確定表』は、制作担当者が、番組の放送日時・曜日、放送波、番組名、副題、出演者などの番組情報を記して編成担当者に送付する『番組通知票』を元に作成される。このことから、『番組確定表』は、制作担当者の番組への意図が公式に反映された資料であるといえる。

本研究は、『番組確定表』に記載された番組副題に対して形態素解析をおこない、内容の変化を品詞分布の変遷から数量的に計測し、分析する。

番組副題とは、放送枠名とは別に、その放送回の主題を端的に示すために付されるものである。たとえば、調査期間の冒頭すなわち1980年3月

31日に放送された『婦人百科』の副題は、「やさしい折り紙」、末尾にあたる1990年3月30日に放送された『婦人百科』の副題は、「クロス・ステッチで飾るポーチ」である。

この副題に対して形態素解析を用いて品詞分布の変遷を分析することにより、当時の番組内容の変化を数量的に把握することが可能であると考えられる。

形態素解析の対象としては、『番組確定表』に記載された副題以外に、『EPG（電子番組ガイド）』に記載される副題（番組名）や番組内容（番組記述）も有効であると考えられる。しかし、本研究の調査期間においては、『EPG』は実用化されておらず、本研究の対象としえなかった。

なお、『番組確定表』に基づき、特定の放送枠内での副題によって放送の内容を実証的に分析し、当該放送番組（放送枠）が持つ歴史的意義を明らかにした研究には、長廣（2004）「現代邦楽放送年表——NHKラジオ番組『現代の日本音楽』放送記録（64.4～72.3）」 [25]を始め、野村（2004）「昭和初期のラジオが提供した『婦人』向け学習プログラム——1925-33年の番組分析から——」 [26]、野村（2011）「昭和初期におけるラジオ放送による大学開放講座」 [27]、佐藤（2013）「1925～1926年にかけてのJOAKにおけるオペラ関連番組」 [28]がある。

本研究では、まず、女性向け実用教養番組である『婦人百科』の1980年代における放送を対象として副題の全数調査と分析をおこない、次に、いけばなを題材とした放送回を対象を絞り込んで調査と分析をおこなうことによって、テレビの変

化期における女性向け実用教養番組の内容の変遷をより精細に調査し分析する。

いけばなは、1925年に日本で放送が開始されて以降、ラジオにおいてもテレビにおいても一貫して実用教養番組の題材となっていた [31]。

1980年代の『婦人百科』では、いけばな、茶の湯、書道、短歌、俳句など、さまざまな題材が採り上げられた。このうち、1980年代において毎年度、題材として採り上げられているのは、いけばなと茶の湯であるが、いけばなが毎年度毎月一回定期的に編成されているのに対し、茶の湯は、1980年度は10月、11月、12月、1981年度は5月、6月、7月、1988年度は6月と2月、1989年度は11月と3月というように、散発的で不定期な編成 [32] となっている。また、書道は、1980年度から1983年度までと1988年度にしか採り上げられておらず [33]、短歌と俳句は、1984年度までしか採り上げられていない [34]。

対象視聴者層との関連では、1980年代における、いけばな（華道）の行動者率は、1986年の「社会生活基本調査」によれば、男性0.3に対し女性12.1 [35] と女性が男性の40倍強だった。これに対し茶の湯（茶道）は、男性0.5に対し女性5.3 [36] と女性が男性の10倍強であり、いけばな（華道）に比して四分の一程度の低い男女比にとどまっている。

いけばなは、1980年代において、その編成の周期性および対象視聴者層である女性の行動者率の高さから、女性向け実用教養番組の題材の中核だったといえる。このことにより、本研究は、いけばなを特定の題材についてのケーススタディの対象として選定している。

以下、本研究では、まず『番組確定表』の調査に基づいて、テレビの変化期すなわち1980年代における、女性向け実用教養番組『婦人百科』の副題に対して形態素解析をおこない、その結果を示す。次に、そのうちで、特にいけばなを題材とした放送回に対する形態素解析の結果を抽出する。その上で、形態素解析の結果に基づき、テレビの変化期における女性向け実用教養番組の内容の変化について考察する。

なお、テレビ番組に対して形態素解析を用いた研究には、金・江原・相沢「形態素解析情報に基づく長い日本語ニュース文の分割」 [29] や三上・

増山・中川「ニュース番組における字幕生成のための文内短縮による要約」 [30] があるが、いずれもニュース番組の内容を短縮化するための技術的方法を探るものであって、番組内容の精査を目的としたものではない。

2. 調査結果：テレビの変化期における女性向け実用教養番組副題の年度ごと品詞分布とその遷移

調査対象期間における『婦人百科』の放送本数は1853本（総合テレビでの本放送のみ、総合テレビおよび他の放送波での再放送を除く。ただし、総合テレビでの本放送が休止され再放送枠が初回放送となった場合、および本放送と再放送が共に休止され教育テレビ枠での放送が初回放送となった場合を加える）である。

形態素解析は、まず副題から放送枠名（『婦人百科』）や記号などを取り除くクリーニングをおこない、次にオープンソース型の形態素解析エンジン MeCab [37] を用いて解析を実施した。たとえば、1990年1月29日に放送された『婦人百科』における番組副題「早春のはずむ心をいける」は、「早春 名詞」、「の 助詞」、「はずむ 動詞」、「心 名詞」、「を 助詞」、「いける 動詞」というように解析した。

MeCabの文法ルールや辞書による解析の結果に対しては、適宜修整を加えた。たとえば、1982年9月6日に放送された『婦人百科』における番組副題「9月のいけばな 一清風瓶華」においては、MeCabによって「いけばな」は「いけ 動詞、自立」、「ば 助詞、接続助詞」、「な 助詞、終助詞」と解析されるが、「いけばな」としてまとめ、一つの名詞とした。また、この例における「清風瓶華」を始めとして、「古流松藤会」、「つり花」、「かけ花」、「小品花」、「温室花」、「夏草」、「秋草」、「枯れ物」、「花木もの」、「涼しさ」、「テーブルコーディネート」、「春らんまん」、「投げ入れ花」などは複数の名詞に分解されるが、複合名詞として、一つにまとめた。また、「華やかに」、「身近な」、「清楚に」などは形容動詞語幹と助詞に分解されるが、一つの形容動詞とした。動詞では「いけなおす」、「いけ直す」などを一つの動詞とした。なお、MeCabの解析では、品詞に加えて品詞細分類が呈示され

る場合があるが、本研究では細分類は考慮していない。

こうした解析をおこなった上で、年度ごとに動詞、形容詞、形容動詞、名詞、代名詞、連体詞、副詞、感動詞、助詞、助動詞の出現数をカウントし、出現率を算出した。

調査期間として設定した 1980 年度から 1989 年度まででの『婦人百科』の副題における年度ごとの品詞分布について、出現数は表 2、出現率（小数点以下四捨五入・以下同）は図 2 のとおりである。なお、動詞と名詞については、表 2 にそれぞれの出現率も付記した。

表 2 『婦人百科』年度ごとの品詞分布（出現数）

	1980	1981	1982	1983	1984	1985	1986	1987	1988	1989
動詞	70	55	80	69	98	133	121	95	115	113
(動詞出現率)	8%	6%	9%	7%	9%	12%	11%	9%	10%	10%
形容詞	4	16	8	24	20	24	12	8	16	18
形容動詞	3	13	11	11	20	15	23	18	13	24
名詞	603	551	542	565	561	576	569	552	596	583
(名詞出現率)	66%	64%	63%	59%	54%	52%	53%	54%	54%	53%
代名詞	0	0	0	0	0	0	1	4	6	7
連体詞	1	0	0	0	4	2	8	3	4	3
副詞	0	0	0	0	1	2	0	5	1	2
感動詞	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0
助詞	231	222	221	283	322	338	332	328	353	342
助動詞	1	2	0	4	10	11	5	6	9	6
総計	913	859	862	956	1035	1099	1071	1014	1112	1096
(参考)										
放送本数	188	185	185	186	182	188	185	186	182	186

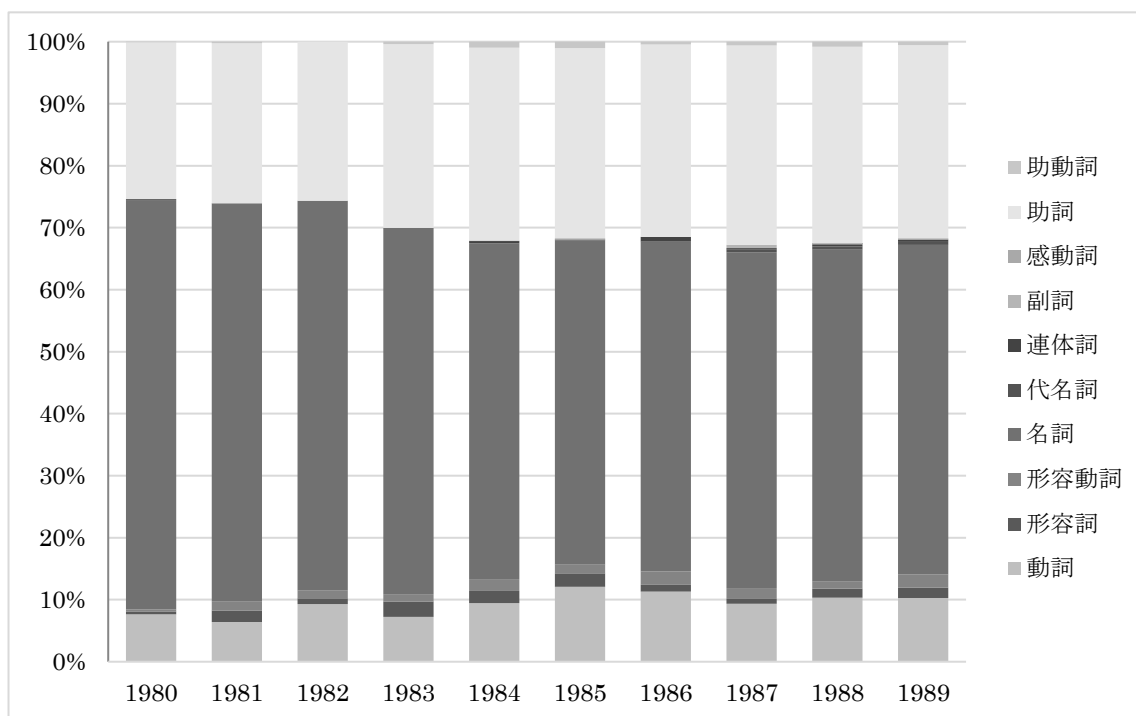


図2 『婦人百科』年度ごとの品詞分布 (出現率)

表2 および図2 が示すように、1982年度までは、名詞の出現率が60%台(小数点以下四捨五入・以下同)であったものが、1983年度に59%に減少し、1984年度に54%となって以降は50%台前半で推移している。一方、動詞の出現率は1980年度には8%だったものが、1985年度に12%を記録し、その後、1987年度の9%を除き10%台で推移している。このことから、1980年代において、名詞の出現率が減少し動詞の出現率が増加するという変化が生じたことが確認できる。[38]

続いて、テレビの変化期における女性向け実用教養番組『婦人百科』での、いけばなを題材とした回の副題に対する形態素解析の結果のみを抽出して図表化した。

調査対象期間における、いけばなを題材とした『婦人百科』は、1983年8月および1984年8月を除いて[39]、毎月1本必ず放送されており、その総放送本数(総合テレビでの本放送を算出の対象とするが、本放送休止により教育テレビのみの放送となった場合も対象に加えた)は、118本である。

表3 および図3 が示すように、名詞の出現率は1980年度から1982年度までは67~68%と全体

の三分の二以上だったが、1983年度には、50%に比率を落とし、1984年度以降は、概ね40%台(1986年度のみ38%)で推移している。

一方、1980年度から1982年度までの3年間はまったく使われていなかった動詞が、1983年度から出現し、1984年度以降の出現率は1985年度の18%を除き20%台で推移している。

表3 および図3 の結果から、1980年代には、いけばなを題材とする回においても中期から名詞と動詞の出現率に変化が生じたことが明らかである。そして、その変化の現れ方を、『婦人百科』全体の変化のそれと比較すると、比率の変動はより大きいものの、変化の傾向は、1980年代中頃を境として名詞の出現数および出現率が減少し動詞の出現数および出現率が増加するという点で、概ね合致していると認められる。

そこで、いけばなを題材とする回について、より詳細に分析することとし、副題に現れた語句のうち、名詞「いけばな」と動詞「いける」を抽出した。副題には表記揺れがあるため、名詞「いけばな」には、「いけ花」、「生花」を含め、動詞「いける」には、「生ける」、「活ける」を含めることによって統制した。また、名詞「お花」および複合動詞「いけ直す」も、この時期の副題に

表 3 いけばなを題材とした回での年度ごとの品詞分布（出現数）

	1980	1981	1982	1983	1984	1985	1986	1987	1988	1989
動詞	0	0	0	8	11	12	13	11	11	13
(動詞出現率)	0%	0%	0%	16%	25%	18%	23%	22%	22%	22%
形容詞	0	0	0	0	0	1	2	0	0	0
形容動詞	0	0	0	0	1	1	1	0	0	0
名詞	24	24	26	25	18	31	21	21	21	24
(名詞出現率)	67%	67%	68%	50%	41%	47%	38%	42%	43%	40%
代名詞	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
連体詞	0	0	0	0	0	0	2	0	0	0
副詞	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
感動詞	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
助詞	12	12	12	17	14	21	17	18	17	23
助動詞	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
総計	36	36	38	50	44	66	56	50	49	60
(参考)										
放送本数	12	12	12	11	11	12	12	12	12	12

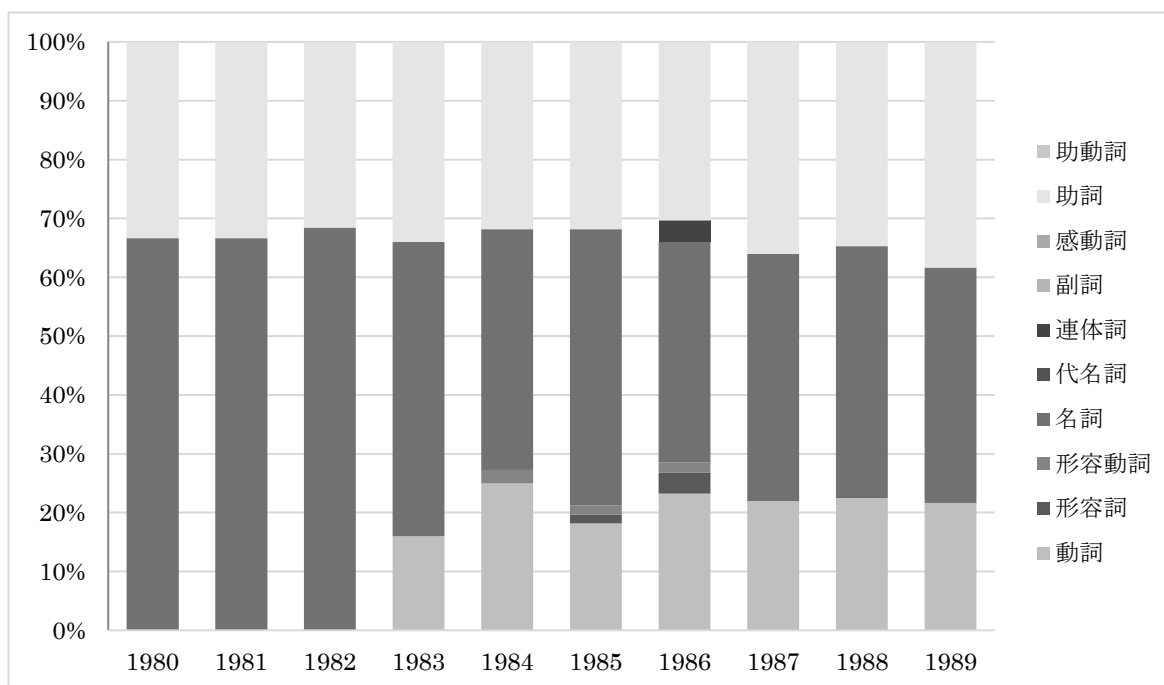


図 3 いけばなを題材とした回での年度ごとの品詞分布（出現率）

おいてはそれぞれ「いけばな」または「いける」と同様の意味で用いられているものとみなして、「いけばな」または「いける」に分別した。

統制を加えて「いけばな」と「いける」を抽出した結果、両者の比率の年度ごとの推移は図4のようになった。

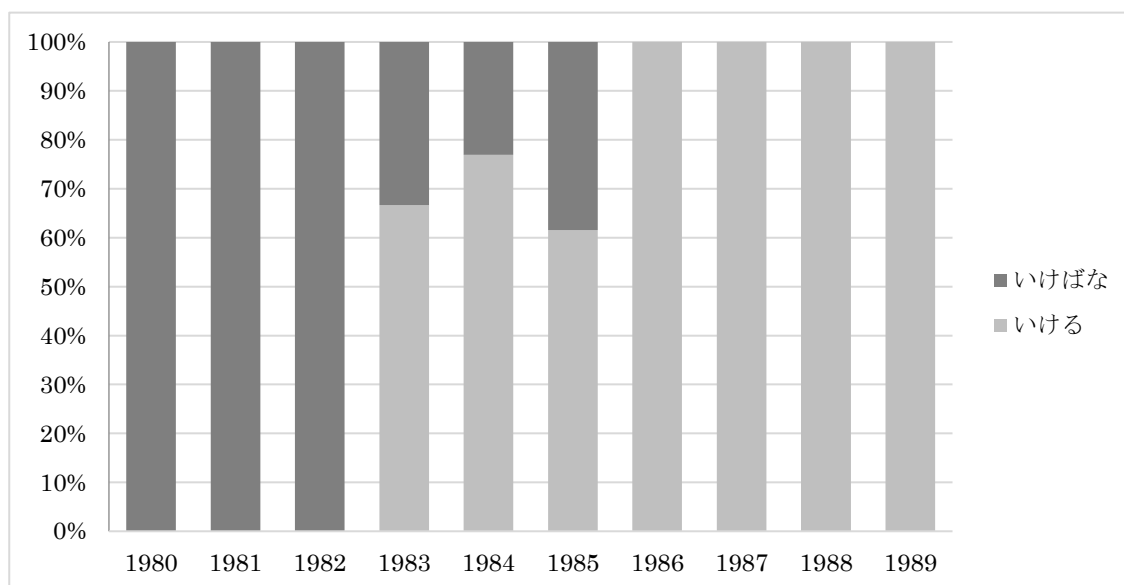


図4 年度ごとの「いけばな」と「いける」の比率推移

図4に示すとおり、1980年度から1982年度までの3年間は、「いけばな」のみで、「いける」は現れない。1983年度から1985年度までの3年間は、「いける」と「いけばな」が併存し、割合は「いける」のほうが大きい。1986年度から1989年度までの4年間は、「いける」のみで「いけばな」は現れない。

1980年代における女性向け実用教養番組『婦人百科』での、いけばなを題材とする回は、初期3年間は副題に「いけばな」のみが用いられ、中期3年間は副題に「いけばな」と「いける」が併存し、後期4年間は副題に「いける」のみが用いられる、というように、期を追って変化している。1980年代での、いけばなを題材とした『婦人百科』は、副題における名詞「いけばな」と動詞「いける」の出現の有無によって、名詞「いけばな」のみの時期、名詞「いけばな」と動詞「いける」が併存する時期、動詞「いける」のみの時期の三つに区分できることになる。[40]

以上、本章では、『番組確定表』の調査に基づいて、テレビの変化期すなわち1980年代における、女性向け実用教養番組『婦人百科』の副題および、そのうちの、いけばなを題材とした回の副題について、形態素解析をおこなった結果を記した。次章では本章の結果について考察する。

3. 考察: テレビの変化期における副題の形態素解析結果が示すもの

本研究の調査で明らかになった1980年代の『婦人百科』番組副題における、名詞と動詞の比率変化、および、いけばなを題材とした回における名詞「いけばな」から動詞「いける」への遷移には、なんらかの要因が介在していると考えられる。

当時の編成を記録した資料である各年度の『NHK年鑑』によれば、『婦人百科』の年度ごとの記述は、本研究の「1. はじめに」で示した表1のように推移している。そして、その番組概要は1985年度を境に変化している。また、対象視聴者層についても、1986年度までは「家庭婦人」のみが対象だったが、1987年度から「男性」も対象に加える記述が出現する。

これらのことから、1980年代における『婦人百科』は、その対象視聴者層と番組概要に基づき、三つの時期に区分できる。改めてその区分を整理して示せば表4のようになる。

表 4 1980年代『婦人百科』の時期区分

時期区分 (年度)	対象視聴層	番組概要
I (1980-84)	家庭婦人	趣味と教養
II (1985-86)	家庭婦人	実技指導
III (1987-89)	家庭婦人と男性	実技指導

表 4 に示したように、『婦人百科』においては、1980 年代の半ば以降において、まず番組概要が「趣味と教養」から「実技指導」へと転換された。次いで、対象視聴者層（家庭婦人）の限定を緩和して男性を付加することがおこなわれた。

そこで、本研究では、まず、「番組の概要」における記述の変化と副題における名詞と動詞の比率推移の関係について検討する。

「番組の概要」においては、1984 年度までは「趣味と教養」がキーワードとなっていたが、1985 年度以降は、「実技指導」がキーワードとなっている。

山口明德編『国文法講座』（1988）は、名詞と動詞を対比して論じ、“意味の面からの分類”において、名詞を“ア、事物の名称を表す”ものとし、動詞を“イ、動きのある事態を表す”ものとした上で、“この意味の面からの分類は、語の形に対応する。アが活用しないのは事物を静の物として捉えたからと考えられる。それに対して、イは動であり、それは刻々と変化していく。変化しない事物、変化する動き、その捉え分けが、アとイとの間の活用しない、するの違いに反映していると考えられる”と述べている [41]。

本研究は、この考え方に立脚し、名詞は事物を「静の物」として捉える性格を有するものとし、動詞は事物を「動（の物）」として捉える性格を有するものとして規定する。

「番組の概要」に現れる「趣味と教養」および「実技指導」は共に名詞ではあるが、前者の「趣味と教養」が「静の物」である名詞「趣味」と「教養」を並立した表現であるのに対し、後者における「指導」はサ変動詞「する」と複合して「指導する」となりうることから動作の意味合いを強く持つ、すなわち「動」としての性格を有しているといえる。

したがって、「趣味と教養」から「実技指導」へと制作方針が移行されたことと、「静の物」で

ある名詞を使う表現から「動」である動詞を使う表現へと副題における比率が遷移したことは、呼応しているとみなすことができるだろう。

次に、『婦人百科』の対象視聴者層が「家庭婦人」のみから「家庭婦人と男性」へと変化したことと副題における名詞と動詞の比率推移の関係について検討する。

対象視聴者層が変化したことの背景には、女性の社会進出によって、家庭にいる女性（家庭婦人）という対象視聴者層の存在が相対的に希薄化したことがある。既に 1976 年度から『婦人百科』は夜 9 時台に再放送枠が設けられ、“勤労者や忙しい人たちの要望にこたえ” [42] ていたことも、これを裏付けるといえる。家庭にいる女性の存在が希薄化した結果が、対象視聴者層において、1987 年度以降、「家庭婦人（家庭にいる女性）」のみから「男性も」、「男性までを」、「男性までを含めた」といった記述への変化を生んだのである。なお、対象視聴者層の拡大は、1984 年度の組織改正によって、『婦人百科』の担当部局が、それまでの家庭部から新たに設けられた生涯教育部へと移管されたこととも関連していよう。

対象視聴者層が変化したことの背景にはまた、女性の社会進出に加えて、日本人の余暇の過ごし方の多様化も介在していると考えられる。

日本人の余暇の過ごし方の変化に教養番組のあり方が呼応することは、既に 1960 年代末に荒牧（1968）が“これは教養・娯楽費の支出の漸増とともに、映画・演劇・『見るスポーツ』等から、旅行・『するスポーツ』『日曜大工・庭いじり』など能動的な余暇利用の仕方の増大に見合うともいえよう。” [43] と指摘していたことであった。

また、同じ頃に見田ら（1967）は、教養番組の将来は“スタティックな教養からダイナミックな教養へという『教養』概念そのものの不可避的な変革を制作者たちがどのように自覚して先取りしていくか” [44] が問題であると述べていた。

1980 年代に、女性向け実用教養番組である『婦人百科』の番組概要に示された制作方針の変化は、見田らの先見的な指摘を制作者たちが具現化した結果であるともいえる。そして、スタティックすなわち「静」からダイナミックすなわち「動」へという変革が、『婦人百科』の副題における「静の物」である名詞から「動」である動詞への変化というかたちで表出したといえるだろう。

一方、『婦人百科』の対象視聴者層における「女性」の希薄化は、いけばなを題材とする回の副題における名詞「いけばな」から動詞「いける」への遷移とも関連していると考えられる。

なぜならば、いけばなは、明治以降、女性の嗜むものとなり [45]、1986年の「社会生活基本調査」によれば、いけばな（華道）の行動者率は男性 0.3 に対し女性 12.1 [46] と女性が男性の40倍強であって、女性向けというイメージが極めて強固だった。女性のみでなく、男性をも対象視聴者層に含めるとすれば、女性向けというイメージが強い「いけばな」という語を避ける傾向が生まれるのは自然である。1980年代の副題において、当初、「いけばな」のみであったものが、「いける」が出現し、やがて「いけばな」が消失するにいたることは、このことを反映したものだのではないだろうか。

戸村（1991）は、1980年代の視聴動向について、三つの時期に区分し、1981年頃までを「安定期」、1982～87年頃までを「低迷期」、1988年頃からを「展開期」とした [47]。第2章で明らかにした、『婦人百科』における「いけばな」と「いける」の比率推移が示す三つの時期区分は、この戸村の時期区分と1年程度の階差を持って概ね符合している。戸村は、1980年代を三つの時期に区分した上で、中間にあたる「低迷期」を“テレビの送り手は視聴者との新しい関係を模索していたように見える” [48] 時期としている。この「模索」が、「いけばな」から「いける」へと遷移する過程での両者の併存に現れているとみなすこともできるだろう。

以上、本章では、第2章での調査結果に基づいて、女性向け実用教養番組『婦人百科』での副題における品詞分布比率の遷移が示す意義を考察した。

本研究がテレビの変化期と規定した1980年代において、番組の形式には表立った変化がなかった女性向け実用教養番組『婦人百科』では、女性の社会進出および余暇活用の多様化という社会情勢に呼応して、番組内容が変容しており、その変容の様相は、副題の形態素解析によって数量的に明示できるといえる。また、特にいけばなを題材

とする回では、対象視聴者層の位置づけの変化が、副題における名詞「いけばな」から動詞「いける」への遷移という態様で、より鮮明に現れたと考えられる。

4. おわりに

本研究では、1980年代のテレビの変化期における女性向け実用教養番組『婦人百科』の番組内容について、番組副題を形態素解析によって分析し、考察した。

その結果、これまで、新機軸番組の出現が主として注目されていたテレビの変化期において、番組の形式は従前のままであった『婦人百科』にあっても、その番組内容を表す副題には品詞分布の遷移が生じていたことを数量的に示した。

俯瞰してみれば、視聴時間の減少という事態に対して、新機軸番組の出現だけではなく、既存番組においても、その内容を社会情勢に対応させようという動きが生じていたことになる。女性向け実用教養番組『婦人百科』を対象とした本研究は、その一様相を明らかにしたといえよう。

これらの事実は、放送メディアの歴史において留意すべきことであると同時に、「テレビ離れ」が進む今日においても、情勢に対応した変革が重要であるという点で示唆に富むものと思われる。

1980年代以降、日本におけるテレビの視聴時間は、“1985年前後を底に、再び増加の道をたどりはじめ（中略）、95年に3時間30分を超え、” [49] 2003年頃には“3時間45分前後にまで伸びて安定” [50] する。そして、その後、インターネットの台頭が起こるまでのあいだ、テレビは安定した視聴時間を保ち続けることになる。

本研究は、数量的分析を研究の主眼としたため、当時の番組制作担当者へのインタビューやさらに詳細な資料調査をおこなうにはいたらなかった。また、茶の湯や裁縫などいけばな以外の題材を扱った『婦人百科』や女性向け実用教養番組以外の分野でのテレビ番組への形態素解析の適用とその結果の考察も残されている。これらのことは、今後の課題としたい。

注・文献

- [1] NHK 放送文化研究所. 「日本人とテレビ 2015」調査.
- [2] “NHK 放送文化研究所. 「日本人とテレビ 2015」調査 結果の概要について” 〈http://www.nh.or.jp/bunken/research/yoron/pdf/20150707_1.pdf〉 p.1 (参照 2016-11-30)
- [3] “NHK 放送文化研究所. 「日本人とテレビ 2015」調査 結果の概要について” 〈http://www.nh.or.jp/bunken/research/yoron/pdf/20150707_1.pdf〉 p.1 (参照 2016-11-30)
- [4] 戸村栄子. データにみる 80 年代のテレビ視聴動向 その 1 テレビ視聴の変化. 放送研究と調査. Vol.41, No.6, 1991, p.67
- [5] 戸村栄子, 白石信子. 今, 人びとはテレビをどのように視聴・評価・期待しているか～「テレビ 40 年」調査から～. 放送研究と調査. Vol.43, No.2, 1993, p.4
- [6] 井上宏. “編成の時代”と編成研究. テレビ新時代—80 年代テレビへの展望— 放送学研究 33. 日本放送協会・総合文化研究所, 1981, p.125
- [7] 井上宏. “編成の時代”と編成研究. テレビ新時代—80 年代テレビへの展望— 放送学研究 33. 日本放送協会・総合文化研究所, 1981, p.123
- [8] 戸村栄子, 白石信子. 今, 人びとはテレビをどのように視聴・評価・期待しているか～「テレビ 40 年」調査から～特集 テレビ 40 年・視聴者の意識と番組編成の変遷. 放送研究と調査. Vol.43, No.2, 1993, p.4
- [9] 白石信子, 井田美恵子. 浸透した「現代的なテレビの見方」平成 14 年 10 月「テレビ 50 年調査」から. 放送研究と調査. Vol.53, No.5, 2003, p.33
- [10] 戸村栄子, 白石信子. 今, 人びとはテレビをどのように視聴・評価・期待しているか～「テレビ 40 年」調査から～. 放送研究と調査. Vol.43, No.2, 1993, p.5
- [11] 戸村栄子. データにみる 80 年代のテレビ視聴動向 その 1 テレビ視聴の変化. 放送研究と調査. Vol.41, No.6, 1991, p.59 に掲載の図を元に作成. (〈原資料〉. NHK 全国視聴率調査」各年 6 月)
- [12] 1985 年の視聴率ベスト 10 には「クイズ面白ゼミナール」が 5 位, 「なるほど!ザ・ワールド」が 6 位にランクインしている.
- [13] 白石信子, 井田美恵子. 浸透した「現代的なテレビの見方」平成 14 年 10 月「テレビ 50 年調査」から. 放送研究と調査. Vol.53, No.5, 2003, p.26-55
- [14] 井上宏. “編成の時代”と編成研究. テレビ新時代—80 年代テレビへの展望— 放送学研究 33. 日本放送協会・総合文化研究所, 1981, p.123
- [15] 戸村栄子. データにみる 80 年代のテレビ視聴動向 その 1 テレビ視聴の変化. 放送研究と調査. Vol.41, No.6, 1991, p.58-67
- [16] 戸村栄子, 白石信子. 今, 人びとはテレビをどのように視聴・評価・期待しているか～「テレビ 40 年調査」から～特集 テレビ 40 年・視聴者の意識と番組編成の変遷. 放送研究と調査. Vol.53, No.5, 2003, p.4-13
- [17] 白石信子, 井田美恵子. 浸透した「現代的なテレビの見方」平成 14 年 10 月「テレビ 50 年調査」から. 放送研究と調査. Vol.53, No.5, 2003, p.26-55
- [18] 戸村栄子. データにみる 80 年代のテレビ視聴動向 その 2 視聴動向の特徴. 放送研究と調査. Vol.41, No.8, 1991, p.48
- [19] 戸村栄子. データにみる 80 年代のテレビ視聴動向 その 2 視聴動向の特徴. 放送研究と調査. Vol.41, No.8, 1991, p.48
- [20] 荒牧富美江. テレビ放送における婦人番組の変遷. 立正女子大学短期大学部研究紀要. Vol.12, 1968, p.22-43
- [21] 日本放送協会・総合放送文化研究所放送史編修室編. NHK 年鑑’ 81—NHK 年鑑’ 90. 日本放送出版協会, 1981-1990
- [22] 日本放送協会・総合放送文化研究所放送史編修室編. NHK 年鑑’ 81—NHK 年鑑’ 90. 日本放送出版協会, 1981-1990 より作成.
- [23] 日本放送協会・総合放送文化研究所放送史編修室編. NHK 年鑑’ 81—NHK 年鑑’ 90. 日本放送出版協会, 1981-1990 による.

- [24] 長廣比登志. 現代邦楽放送年表——NHK ラジオ番組「現代の日本音楽」放送記録 (64.4~72.3). 京都市立芸術大学日本伝統音楽研究センター編. 日本伝統音楽研究. 第1号別冊改訂版, 京都市立芸術大学日本伝統音楽研究センター, 2004, p.7. 長廣は, 日本放送協会にディレクターとして勤務し, 後に, 京都市立芸術大学教授となった.
- [25] 長廣比登志. 現代邦楽放送年表——NHK ラジオ番組「現代の日本音楽」放送記録 (64.4~72.3). 京都市立芸術大学日本伝統音楽研究センター編. 日本伝統音楽研究. 第1号別冊改訂版, 京都市立芸術大学日本伝統音楽研究センター, 2004, p.1-192
- [26] 野村和. 昭和初期のラジオが提供した「婦人」向け学習プログラム —1925-33年の番組分析から—. 日本社会教育学会紀要. Vol.40, 2004, p.51-59
- [27] 野村和. 昭和初期におけるラジオ放送による大学開放講座. UEJ ジャーナル. Vol.3, 2011, p.11-16
- [28] 佐藤英. 1925~1926年にかけてのJOAKにおけるオペラ関連番組. 日本大学法学部桜文論叢編集委員会. 桜文論叢. Vol.85, 2013, p.135-157
- [29] 金淵培, 江原暉将, 相沢輝昭. 形態素解析情報に基づく長い日本語ニュース文の分割. 情報処理学会第44回全国大会講演論文集(人工知能及び認知科学). 1992-02-24, p.179-180
- [30] 三上真, 増山繁, 中川聖一. ニュース番組における字幕生成のための文内短縮による要約. 自然言語処理. Vol.6, No.6, 1999, p.65-81
- [31] ラジオについては, 辻泰明. 初期ラジオ放送における, いけ花講座番組—メディアが文化の伝播に果たした役割—. いけ花文化研究. Vol.2, 2014, p.47-73 および昭和戦中・戦後期ラジオ放送における「いけ花講座」の研究. いけ花文化研究. Vol.3, 2015, p.21-36 を参照. テレビについては, 辻泰明. ラジオからテレビへの転換期におけるメディア編成—「いけ花講座」番組を中心として—. 図書館情報メディア研究. Vol.14, No.1, 2016, p.41-60 を参照.
- [32] 総合テレビでの本放送のみ, 再放送は含まない. なお, 1980年代における茶の湯の編成月は, 1980年度10月, 11月, 12月, 1981年度5月, 6月, 7月, 1982年度11月, 12月, 1月, 1983年度6月, 7月, 1月, 2月, 1984年度5月, 6月, 7月, 1985年度11月, 1月, 2月, 3月, 1986年度5月, 10月, 2月, 1987年度5月, 10月, 3月, 1988年度6月, 2月, 1989年度11月, 3月だった.
- [33] 1983年度までは「書道」, 1988年度は「実用書道」.
- [34] 1984年度まで「短歌入門」および「俳句入門」. 1985年度からは, 独立した別の放送枠として編成された.
- [35] 総務庁統計局編. 昭和61年社会生活基本調査報告 全国生活行動編 その2. 財団法人日本統計協会, 1988, p.26
- [36] 総務庁統計局編. 昭和61年社会生活基本調査報告 全国生活行動編 その2. 財団法人日本統計協会, 1988, p.26
- [37] MeCab 0.996を用いた.
- [38] 「クロス・ステッチで飾るポーチ」の例にみられるとおり, 副題において, 一まとまりの概念を表現する時に, 基本的には動詞は一つであるのに対し, 名詞は複数これに対応するのが通常であると考えられるため, 絶対数は動詞のほうが名詞より少なくなる.
- [39] 1983年8月は第65回全国高校野球選手権大会のため放送休止(再放送枠および教育テレビでの放送枠も休止). 1984年8月はオリンピック・ロサンゼルス大会中継のため放送休止(再放送枠および教育テレビでの放送枠も休止).
- [40] 『婦人百科』のうち, 特に「いけばなを題材とした回」の副題において, 「いける」以外に「いかす」, 「楽しむ」, 「飾る」, 「遊ぶ」, 「祝う」といった多様な動詞が用いられるようになることも, 名詞から動詞への遷移の実態を示すものといえる. 「いかす」は, 1983年4月6日の副題「空間をいかすつり花・かけ花」, 1985年6月10日の副題「花器の質感をいかす」に出現する. 「楽しむ」は, 1983年10月5日の副題「動きを楽しむいけばな」, 1985年11月18日の副題「晩

- 秋の草色を楽しむ」, 1986年3月10日の副題「芽と草花を楽しむ」, 1988年9月19日の副題「投げ入れ花を楽しむ」に出現する。「飾る」は, 1985年8月5日の副題「テーブルを飾る花」, 1986年8月25日の副題「小さな器に飾る花」, 1989年8月7日の副題「遊び心で飾る花」, 1990年3月19日の副題「春のパーティーに飾る花」に出現する。「遊ぶ」は, 1987年12月21日の副題「出合いを遊ぶ花」に出現する。「祝う」は, 1988年8月22日の副題「家族を祝う花」に出現する。
- [41] 山口明穂編. 国文法講座 別巻 学校文法—古文解釈と文法. 明治書院, 1988, p.17-18
- [42] 日本放送協会・総合放送文化研究所放送史編修室編. NHK年鑑'77. 日本放送出版協会, 1977, p.121
- [43] 荒牧富美江. テレビ放送における婦人番組の変遷. 立正女子大学短期大学部研究紀要. Vol.12, 1968, p.34
- [44] 見田宗介, 吉田潤. 教養番組の構造 視聴にみられる理念と行動のずれ. 放送文化 Vol.22, No.4, 1967, p.11
- [45] 工藤昌伸. 日本いけばな文化史 四 近代いけばなの確立. 同朋社出版, 1993, p.98-100
- [46] 総務庁統計局編. 昭和 61 年社会生活基本調査報告 全国 生活行動編 その 2. 財団法人日本統計協会, 1988, p.26
- [47] 戸村栄子. データにみる 80 年代のテレビ視聴動向 その 1 テレビ視聴の変化. 放送研究と調査. Vol.41, No.6, 1991, p.67
- [48] 戸村栄子. データにみる 80 年代のテレビ視聴動向 その 1 テレビ視聴の変化. 放送研究と調査. Vol.41, No.6, 1991, p.67
- [49] 白石信子, 井田美恵子. 浸透した「現代的なテレビの見方」平成 14 年 10 月「テレビ 50 年調査」から. 放送研究と調査. Vol.53, No.5, 2003, p.34
- [50] 白石信子, 井田美恵子. 浸透した「現代的なテレビの見方」平成 14 年 10 月「テレビ 50 年調査」から. 放送研究と調査. Vol.53, No.5, 2003, p.34
- (2016年12月3日 受付)
(2017年4月11日 採録)
(2017年8月31日 出版)